モンスターハンター 愚かなネズミの流れ仕事日記

レオとレオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンター　愚かなネズミの流れ仕事日記

【Ｎコード】
Ｎ２１６７Ｋ

【作者名】
レオとレオ

【あらすじ】
流れのハンター、ラットが様々な依頼をヒロインのルースと共にこなし旅をするお話。
戦闘はあっさり、生活もなんかあっさりになったモンハン小説です。
暇潰しにもならないかもしれないけど、よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

登場人物の名前を間違える大ポカをやらかしました。という訳でプロローグ差し替えです。
ごめんなさい・・・（泣）

プロローグ

人には知能がある

幾多もの大自然の脅威に淘汰された人間達は、その知能をもって確かに成長していった。

その成長のおかげか、今では何億もの人間達が、日々それぞれの日常をいろどっている。

しかし。

大自然は、未だ人々に脅威を与え続けている。

凍えるような雪山。
灼熱の火山帯。
草木生い茂る密林。
乾きを与え続ける大砂漠
未開の地、樹海。
踏み入れんとする者は、容赦なく自然が襲いかかってくるだろう。

現在も過去も、人間は武器をその手に構え、自然と戦ってきた。

そして・・・、いずれその勇敢に戦う勇者の事を、人々は敬意をこめてこう呼んだ。

【モンスターハンター】

と。

ラット・ハルバリ。
彼が主役で、
ルース・アンジェラ。
彼女がヒロイン。

まずは、その出会いを語ろう。

ノロップ村編　姫とネズミの出会い　そのいち

「俺とルースが出会ったのって、ノロップ村だよな？」
俺は向かいの暖炉の前で体育座りをしている、猫のように寒さが得意ではない寒がり女に話しかけた。
「・・・」
返事がない、ただの屍のようだ。
また寝てましたか？ルースさん。
暖炉の前よりはこっちの方がいいだろう、俺は座っていたソファから立ち上がり猫女に近づいた。
よくまあ器用に座って眠れるものだ。
「・・・ソファの上でいいかな」

ソファの上に寝かせて毛布をかけておいた、座って寝るよりは健康的だろう。
床に座って、その寝顔を眺める、この寝顔も見慣れたもんだ。
この寝顔は出会った時にも見た気がするな。

実はさっき、ノロップ村の村長から手紙が来ていた。内容は、村の現在とルースの事。
俺は懐かしくてルースに話しかけたんだけど・・・まあソファの上で寝かせている訳で・・・。
あの時は大変だったなぁ・・・。

一年前・・・

竜車に揺られ、向かう先はネフェル山のふもと、ノロップ村だ。
田舎臭い名前だが、これまで立ち寄ったいくつかの村も、こんな感じの名前だった。
アプトノスのカイナの手綱を握る手は、少々かじかんできている。
雪山に近づいてきたのだろう、ノロップ村までもう少しだ。
俺は、横に置いておいたポーチから元気ドリンコを1本取りだし、一気に飲み干した。このポーチは、アイルー族の技術で見た目よりも遥かに大きい物でも入るそうだが・・・俺はあまり多く物を入れたくない。
小さくて頼りない見かけだからだ。

「・・・お」

集落が見えてきた。
意外と大きいが、まあ予想どおり田舎だな。
少し苦笑い、クエストはなんか下位レベルな予感がするよ。
報酬も少なさそうだ。
まあ仕事はするけどね。

村の入り口にたどり着いた。
関所のおっちゃんに札を見せる。
「ハンターカードです、確認よろしくお願いします」おっちゃんはカードを受け取って、眺めた。
「ん、ハンターさんか」
おっちゃんはカードを俺に返して、
「仕事で来たのかい？」と質問してきた。
まあ普通はそう思うか。
「むしろ仕事探しですね、俺常住ハンターじゃなくて流れだから」
おっちゃんは不思議そうに「ほう・・・、流れとは珍しいな。大抵

どこかに腰を据えるもんだが・・・まあそれならまず集会場に行くんだろ？案内させてくれよ」
「いや、自分でまわって見ます」
カイナの手綱を握り直す、さっきからカードを見たおっちゃんの顔がなんか変な表情だ。
嬉しいような驚ろくような、変な表情。
そろそろ退散させて貰おうかな、正直おっちゃんが少し怖い。
「実は仕事が有っても無くても、しばらくココで旅仕度でもしようかな？と。自分で村を見て覚えようと思います」
実際俺は、田舎にしては意外と広かったこの村を自分で見てみたくなった。
「そうかい、残念だね・・・、んじゃゆっくりしていってくれよ」
おっちゃんはポケットから紙を取り出した。
「一応これが村とこの辺の地図だから。まあ持っときな」
「ありがとうございます、それじゃあ。」
手綱を引き、前に進みだす。
まずは、集会場か？
地図を片手に、カイナにはまだ歩いてもらおう、後で旨い飯でも食おうな。

「・・・おじさん」
後ろから声がした。
「なんだ、お前さんか。丁度お前さんに話があったんだ。」
「今の、ハンター？」
「そうだ！」
つい声が大きくなってしまう。
私の上機嫌をどう思ったのか、
「・・・あのハンターのランクは？もしかして・・・もしかして？」
「まあまて、そう急かすな」

こいつはこの村の常住ハンターだ、確かＨＲ３だと本人は言っていた。
よく私に、村に来るハンターのＨＲを聞いくるのだ。
この子は自分より高いランクのハンターと一緒に狩りをし、腕を磨きたがっている。
まあ俺の知る限り、こんな田舎のネフェル山にはＨＲ１か２の新米しかギルドはまわさないから、実際にこの子が誰かと狩りに出たことは無かったのだが・・・
「よろこべルース！あの人はお前よりランクが上だよ！」
「本当に？」
「ああ、ようやく１人じゃない狩りが出来るな！」「それで？彼のランクは？贅沢いえばＨＲ５は欲しいのよ」
よっぽど嬉しいのだろう、跳び跳ねて喜んでいる。
この子のこんな姿はいつも子どもらしいと思う。
こんな子がよく男中心社会の職業であるハンターによくなれたものだ。
「私は、本当に驚いたよ」この子に教えてあげよう、彼が素晴らしいハンターだというその証であるＨＲを。「彼のランクはな・・・」

ノロップ村編　姫とネズミの出会い　そのいち（後書き）

という訳で、短めにさわりだけ書いてみました・・・次回から本格始動です！

そのに

「意外とでかいなぁ・・・」
目の前の木造の建物の大きさに驚いてしまった。
もちろんドンドルマやミナガルデとかのモノとは比べモノにならない、だが田舎のモノとは思えないこのデカさは面白い。
看板には【ノロップ集会・酒場】と書いてある。
ココが集会場で良いのだろう。
入り口から真っ直ぐ道なりに来ただけで着いてしまった、案内なんかいらないなコレ。
両開きのドアを開けて中に足を踏み入れる。
今が昼中ということもあってか、人もまばら。
でも中の酒場の客はもれなく全員こっちを向いてくれた。
強面のおっちゃんどもだ。でも少なくともハンターではない、なぜなら皆、防具を装着していないからだ。ハンターの間じゃあ、装備する防具で格がきまる、まあモチロン普段着で酒場にくるヤツもいるが、基本的に酒場にくるハンターは、仕事終わりで酒でも一杯、の連中ばっかりだ。
それに皆が皆テーブルの横に、くわ・なにやら植物の入った籠・かまなどを置いている。
おそらく仕事終わりの農家だろう。
いきなり見慣れないヤツが来たら驚くよな、さっさと仕事探しちゃお。
視線が刺さる中、普通に集会場部分のカウンターに向かう。
「すいませーん」
カウンターに誰もいない。奥に呼び掛けてみるが、なかなか出てこない。
と、奥からなにやらゴソゴソ音がしてきた。
なんなんだろうか？と思っていると、カウンター奥のドアから人が

出てきた。ごめん、嘘ついた・・・、どうみてもアイルーだ。
「なんニャ？」
普通の灰色のアイルーだ。「なんの用ニャ？」
そういえば、さすらいのコックもこんな毛並みだったな。
「聞いてないよニャ？聞いてないよニャ？」
おっとうっかり。
「・・・いや、てっきりギルド嬢が出てくるものかと思って。一応、ハンターとして仕事に来ましたが、ギルド嬢様はいらっしゃいますか？」
「なんだ、ハンターさんかニャ」
アイルーは後ろを向いて、「ハナカさ～ん、久々のハンターさんだニャー！寝てないで早く起きるニャー！！」
・・・え、マジかよ。
しばらくすると、
「うーん、シバちゃん。ハンターさんなんて来るはずないのよ？今日はギルドにまわすような大きな依頼はなかったし。だから私は真っ昼間から堂々と昼寝しているのよ？わかったら夕方にでも起こしてね」
元々のパーマなのかわからない、よくいえば無造作系、悪くいえば只の寝癖の髪型女が出てきた。
まあギルド嬢は、皆が皆可愛いのが基本だ。
この女も可愛いっちゃあ可愛いが、正直寝起きの顔はだらしが無さすぎていただけない。
「それでも実際にハンターさんが来てるニャ、さっさと仕事するニャ」
そう言うと、シバという名前のアイルーは奥に戻っていった。
「えーと、ハナカさん？」俺は話しかけてみた。
このままじゃ、この人が二度寝をしそうな勢いだったから。
「・・・？、あらあら、本当に人が来てるわ。あなた、ハンターさ

ん？」
「ええ、そうです」
ポケットからカードを出して、彼女に渡す。
「ハンターカードです」
彼女はカードをみて、
「あら・・・本当だわ、でも変ねぇ」
理由はわかりますよ。
「流れのハンターなんです、俺。だから、前の村から一番近かったこの村に来て仕事でもしようかな？と考えた訳で。」
大抵のハンターは、地方の村々がギルドに出した依頼をギルドから受けてその村に向かう、というシステムで行動している。
ドンドルマやミナガルデの常住ハンターがコレに当たる。
だからギルドに依頼を出した訳でも無いのに、この村にハンターが来ることが不思議だったのだろう。まあ俺はこういう場面には慣れっこだ、伊達に何年も流れでハンターやってない。
「ああ、流れの人なのねぇ」
おっとりとしゃべりながら「んじゃ何か依頼を受けるんでしょう？」カウンターの中から紙の束を出した。
「そうねぇ～」
ペラペラペラペラ。
「・・・ちょっといい？」「・・・はい？なんです？」
「ＨＲ９のあなたが、こんな田舎にまで来てギアノス達をイジメようとは、まさか思わないわよねぇ？」
口元が笑ってますよ。
「あ～、んじゃイジメに行きましょうかな？ちょっと旅のストレス発散に」
２人して笑ってしまった。
契約書にサインをし、彼女に渡した。
「それじゃ、近くの宿の場所を・・・」「二階でいいわよ、ハンタ

ーさんの特別室が用意されてるわ」
階段を指差す。
「ありがとうございます」一礼。
部屋はとても広かった。
竜車に積んでいた俺の荷物も運びこんでいてくれたようだ。
・・・いつの間に。
初対面なのにあれだけ話せて、仕事の要領がいいのは流石ギルド嬢だ。
さあ、着替えよう。
今回の依頼、ギアノス１５匹討伐。

コンコン。
ドアのノック音。
誰だろうか、まあ丁度着替え終わった所だ。
「はい、どうぞ」
ギィィ・・・、ドアが開く。
そこには、少女が立っていた、とても可愛らしい女の子だ。
そして。
「さっ、」
「さ？」
「寒いぃぃ・・・」
ヘナヘナ、バタン。
少女は床に倒れこんだ。
「え？えええぇ？！」
このあとラットは、部屋の暖炉に火をつけ、その少女に毛布をかけ、そしていつのまにか眠ってしまった少女をソファに寝かせた。
「・・・」
・・・知り合いかなぁ？いや知らないなぁ。
格好はハンターだが、一体誰だろうか。

少し寒そうに震えたキリン装備の彼女に毛布をもう一枚かけながら、ラットは思った。
『そりゃキリン装備は寒いだろうなぁ・・・、後、寝つきめっちゃいいなぁ・・・』と、・・・我ながらくだらん事を考えていたもんだ。
このあと、少女が起きたのは、翌朝の6時だったな、ていうかそんなに寝てたのかルースは。
昔と現在で大差ない行動パターンだな、ルースは。

「おはようございます」挨拶をしてみた。「・・・おはよう・・・ございい・・・ます」
現在朝6時半くらい、少女はうっすら目を開けたが、まだ眠たいのだろう。
「えーと・・・、コーヒーでも？」
何を話そうか悩んだが、とりあえずさっき淹れておいたコーヒーを勧める事にした。
「は・・・い、いただきます」
彼女はコーヒーをゆっくりと飲んでいた。
その間俺は朝食を頼もうと部屋の呼び出しベルを鳴らした。
このベルは下のカウンターに繋がっているらしい。
タッタッタッ、階段を登る音。
「呼びましたか？ラットさん」・・・昨日の眠たげなハナカさんとは違う、なんかイキイキしている。
「おはようございます、朝食を頼んでいいですか？」「今日のメインはワイルドベーコンのソテーよ、ルースちゃんの分も持ってくるからね」
「はい、お願いしま・・・ハナカさん？」
「はい？」
「あの女の子を知ってるんですか？」
「知ってるも何も、この村の常住ハンターよ？」

・・・ハンターだからってキリン装備でいるのか・・・ここは年中寒いだろうに。
「寒いのが大の苦手な子なんだけど、『この村を守る！』って意気込んじゃって。今やこの村の常住ハンターよ。猫並みに寒さが苦手な子なだから皆反対したんだけどね。」
まあそんな事は実際どうでもいいよ。
「えっと、なんでこの部屋に来たんでしょう？」
ハナカさんは笑いながら、「それはルースちゃんにでも聞いてねぇ～」
・・・あっ、そうですか。

彼女いわく、
「一緒に依頼に行きたいのです」だそうだ。
「私の名前はルース・アンジェラです。ＨＲは３。」
自己紹介しはじめたルースに、早速話の核心を聞いてみた。
「なんで一緒に依頼をしたいと思った？なんで俺なんだ？」
俺は人によって話し方を変える。
これからいい付き合いになりそうなハンターや、ギルド関係者など。そういった自分に得が帰ってきそうな人達とは敬語で話す、が。
「誰だか知らない他人と、しかもイキナリ寒いだかの理由で倒れるヤツとは依頼は行きたくないね。てか寒い理由はその装備だろ」
このルースだか言う女の子にはこの話し方で十分だ。「装備には突っ込まないでください。ようやくキリンを討伐したのが嬉しくて、しかも他に持っている装備より性能が良いんですよ？」
どうみても下位クラスの装備だが・・・まあＨＲ３ならいい装備に入るのか。
「村で日常的にホットドリンクを飲むわけにはいかないし、それにせっかくハンターさんとお話するのに防具を着けないのは失礼かな？と思いまして・・・」
別にそんなことはない、俺なんか普段はガブラス皮のジーンズにＴ

シャツだ、せいぜい上に防寒具を着るぐらい。
「えっと・・・、ここに入ってくる依頼は雪山のモノが大多数です。」
ルースは身振り手振りで頑張って話そうとしている。まあなんか指回したりカップ持っていたりで大体の行動が不可解なのだが。
「私はここの村出身ですが、幼い頃、ハンターだった両親の都合でロックラック方面の砂漠地帯で生活していました。」
あの砂漠都市周辺か。名前だけなら聞いたことはあるが、行ったことはない。
「5才でロックラックのハンター養成所に入れられた時に、両親がこんなことを言ってました。今も覚えています。『ルース、もう会えないかもしれない。パパとママは長い旅に出るよ。会えないかもしれないけど、ルースは私たちの故郷、ノロップ村でパパとママが帰るのを待っていてね、頑張ってね』と。涙を流していました」
ルースは手にカップを持ち続けて言った。
「ハンター養成所の教官は、私がハンターになった時に教えてくれました。『君のお父さんとお母さんはな、君が小さいころにある途方もないくらい強大なモンスターを狩りにいったんだ。』父と母はそれっきり戻って来なかったそうです。」
ルースは少し涙目だ。
「そのモンスターの名はミラボレアス。おとぎ話に出てくる、伝説のモンスターです・・・」
・・・ミラボレアス、だと？
アンジェラという性、そうかあのアンジェラ夫妻の娘か？
そんな名前、ＨＲ８・９の古参の連中なら皆知っている。俺もハンター新入りの頃にはよくお世話になった・・・、あの夫妻の娘がルースだというのか？
「私はノロップ村に帰り、父と母のお墓を見ました。村長いわく死体は無かったので、お墓の下には誰もいない、名前だけ彫られたお墓です」

ルースは真っ直ぐ俺の目を見た。
アンジェラ夫妻は、大陸一番のハンターだった。
１０年くらい前、この大陸にミラボレアスが降り立った。
１１４もの国と街を破壊と蹂躙恐怖におとしいれ、大陸を震撼させる大事件となったが、アンジェラ夫妻がそのミラボレアスを見事討ち取った、というニュースが大陸中を駆け巡ったのだが・・・、２人の姿は見つからなかったそうだ。
「私は両親に誓いました。私は両親に負けないハンターになる。いつか両親を殺したミラボレアスを倒してみせる。この村だって私が守ってみせる！、と。でも私は幼い頃からの砂漠生活のせいか、寒さに物凄く弱いのです。」
アンジェラ夫妻は、ドンドルマのハンター養成所で教官もやっていた。
夫婦で厳しく、ハンターとは何ぞや？を、俺に教えてくれた。厳しく、厳しく。そのおかげで今や俺も夫妻と同じＨＲ９のハンターになることが出来た。
「このままじゃいけない・・・、強くなんてなれないと」いわば夫妻は恩師だ。
この村の出身とは知らなかったが。
「そこで私は、自分よりも腕のある高ランクハンターに教えを請おうと思ったのですが・・・この村にはランクが１や２の新入りしか回されないのです。しかも常住の私が村を不在にしている時の依頼をしているそうです。」
なるほどね、確かにこの辺に上位クラスのモンスターがくるはずがない。
モンスターにも格がある。下位クラスのモンスターしか居なさそうな雪山を制圧しようという上位クラスモンスターは、きっといないだろう。
いつのまにか定められていたのであろう、モンスターの掟だ。
「しかし、昨日あなたがこの村に来てくれた。ＨＲ９の、英雄クラ

スハンターであるあなたが！」
興奮しているな・・・、気持ちはわかるよ。
「是非とも依頼を一緒に受けさせて下さい。私では役にたたないかもしれません、でも精一杯頑張ります！」
立ち上がって勢いよく頭を下げるルース。
「話はわかった」
嫌というくらいに。
「いいよ、教えてやる。いいハンターに俺がしてやる」
久しぶりに胸が熱くなってきた。
いつか恩返しがしたいと思っていた。
こんな形で恩返しができるとは思わなかったが。
「本当・・・ですか？」
涙目のルース、信じられないような顔だ。
「ああ、もちろんだ」
俺は手を差し出す。
「名前もまだだったな。俺はラット・ハルバリ、ＨＲは９。弓使いだ」
君のお母さんと同じね。
あわてて手を出すルース。「るっ、ルース・アンジェラです、片手剣使いです！改めてよろしくお願いいたします！」
固い握手をした後、俺は早速パートナーの彼女にこう言った。

「よし、まずは寝かせてくれ」

昨日の昼から私は徹夜だった、君がいたから。
身につけている防具？知ったことか。

どうせナルガXだ、寝やすさに影響はないだろう。
只今午前9時頃、ルースを気にすることなく俺はベッドに入った。
・・・起きたのは同日、午後4時だった。

そのに（後書き）

リクエストなどがあれば気軽にどうぞ。
読者様の意見が気になる作者です・・・
ラットは２５才、ルースは１５・１６才くらいの設定です。一緒に暮らす事はあっても、ラブコメに繋がる事はないかなぁ・・・。

そのさん（前書き）

ノロップ村→年間平均気温４℃で昼でも寒い。
ルースは普段めちゃくちゃ着こんで生活しています。狩りに行く時はホットドリンクを忘れる事だけは絶対にありません、忘れる＝死だから。

そのさん

ようやく全部終えた。
「やっと仕事だ・・・」
「うぅ、すいません・・・」
何だかんだでルースの準備に時間がかかり、もう夜になっていた。
「まあ道具の確認だもんな、時間はかかる」
一応慰めておこう。
「すみません・・・緊張しちゃって・・・」
「大丈夫だよ、気楽にいこう」
カイナの手綱を引き、ようやく出発だ。
ここから約３０分程で雪山に着くらしい。
「・・・ルースはハンターとしての経験はどの程度だ？キリンは倒しているようだけど」
俺は手綱を引きながら、隣に座っているルースに話しかけた。
経歴がどのくらいのものかは、知っていても損ではない。「えっと・・・フルフルまでの飛竜種、イャンクックやゲリョスなどや、ババコンガなどは戦闘経験があります。」
なるほど、まるっきり初心者ハンター、って訳じゃないようだな。
まあこれでもＨＲ３だしな、それくらいの経験はあるか。
「でもティガレックスやグラビモスとか強いモンスターは、生きている所を見たことがありません。養成所時代に図鑑や、運ばれてきた死骸は一応見ましたが・・・」
なるほどね。
「よくキリンを倒せたな・・・、グラビやティガよりキリンの方が倒すのが難しいはずだけど」
少なくとも弓使いの俺は今でもそうだけど。
「キリンとは激戦でした、一週間は粘って粘って、爆弾や眠り投げナイフなどをフル活用して、ようやく倒せました。片手剣も何回研

いだか覚えてません。」
自慢気に胸をはって話していた、でもすぐにしょんぼりした顔になって、
「後でギルドの人に聞いたらそのキリンは、記録に残る程のミニマムサイズで、中央ギルドでも観測されたことのない小ささだったそうです。」
「いや、それでも一人でキリンを倒したんだろ？それは凄いじゃないか」
凄いんだけどなぁ・・・、その話を聞いたら確かに凄さが半減してしまうような気がする。
「ありがとうございます。それで、ラットさんはどうなんですか？やっぱり沢山モンスターを狩っているのでしょうね。」
「沢山かどうかはわからないが・・・」
普通に言った。
「少なくとも、今会話した中に出てきたモンスターは、全て一人で倒した事があるはず・・・」
「凄いじゃないですか！」それなら君の両親はもっとはるかに凄いよ。
まあ言わないでおこうかな、きっといつか話すだろうし。
「いつか君もできるようになる・・・」
今はこの一言で十分だろう。

そうして俺達はネフェル山のベースキャンプにたどり着いた。
会話をしていると、時がたつのが早いもんだ。
「んじゃ確認するよ」
早速、俺はルースに話す。「ギアノス狩りだ。１５頭も倒せばいいだろう。今は夜だから、おそらく山頂付近、もしくは巣の周辺にいるだろう。」

ルースが頷いている。しっかり聞いているようだ。
「数が数だから、ドスギアノスもいるかもしれない。まあそれは頭に入れておく程度でよろしく。」
「わかりました、それと・・・」
「質問か？」
「部屋にいたときから気になってはいたんですが、その武器と防具はなんですか？図鑑でも見たことがなくて・・・」
「ん」
俺の装備の事か、まあしゃあないか。
「これはナルガXシリーズだ、ガンナー用な。」
「X・・・これがG級装備ですか？！初めて見ました・・・。でもナルガとはなんですか？」
「最近樹海で発見されたモンスターだ、ナルガクルガという名前だよ。とても強かった・・・」
弓使いとは絶対に相性が悪いであろうスピードに、ティガレックス並のパワーだった。
「そのぶん、装備は驚く程強かったんだ。だから愛用している」
鍛冶屋いわく、ナルガ鱗の不思議な力で、自身の身体能力を向上してくれる作用があるそうだ。
「そしてこれが・・・」
背中から、俺の相棒を展開する。
「俺の相棒、破滅弓クーネレラカム。風の神を名に冠する弓だ」
ルースはイマイチ、ピンときてないらしく、
「クーネ、レラカムですか？」
「まあ今はわかんなくていい、今度にでも自分で調べてくれ」
アカムトルムなんて、聞いた事ないだろう。
ここ数年、一件も報告されていないそうだし。
「なんだか凄い事はわかりました・・・」
かくいうルースの装備は、キリンシリーズにアサシンカリンガだ。
まあまあな装備だろう。

しかし・・・
「寒くないのか？」
雪山目の前なんだが。
「もうホットドリンクは飲んでいます！」
早っ。
「苦虫とトウガラシは完備してあります！」
・・・それでいいのかハンターよ。
「そっ、そうなんだ。んじゃ行こうか・・・」

少し速歩きで縦に並ぶ。
前がルース、後ろが俺だ。「基本的な立ち位置はこうだ。剣士が前、ガンナーが後ろ。それくらいわかるよな？」
「はい！」
崖のツタを登り、洞窟の前にたどり着いた。ここからツタを登れば山頂らしいが「まずはやつらの巣を見つけようか」
ギアノス（だけではなく、飛竜種なども）は洞窟の中に巣を作るのだ。
そこを叩いて後は残党狩りをするのが、こういうクエストの、俺なりのやり方。俺は弓使いだから、基本的に多対一の戦いはあまりしたくはないが、相手が相手。
ギアノスくらいなら、今の俺なら同時に百頭でも倒せるだろう。
それに今回はルースもいるから、余裕だろうし。
「さてと」
巣はすぐに見つかった。
洞窟に入ってすぐの崖の下。
その崖の下にギアノス達が5匹。
近くに卵も確認した、完璧な巣だ。
「ラットさん、どうしますか？あそこの入り口は巣の真正面です。」
崖の下の奥を指差すルース。
確かに真正面。

あれでは絶対に見つかる事間違いなしだ。
「んー」いや、まあ考えはあるんだけど。
「奇襲しよう」
「はい！、・・・いやどうやってですか？」
「こうやって」
ルースの手を掴み、ハンマー投げの感じで、崖の下に投げた。
「へ」
空に浮くルース
「きゃあぁぁぁ！」
「よし、俺も」
俺も崖から大ジャンプ。
下のギアノス達はルースの声に驚いている。
「死んじゃうぅぅ～！！」
いや、大丈夫だから。
俺は地面を受け止めるように受け身、ルースはそのまま落ちてきた。
受け身で前転しながら弓を展開。
ギョワギョワうっさいギアノス共を見据え、矢をつがえ、型を作る。
「いくぞ雑魚共！」

「うぅ・・痛・・・くない？」
驚いて立ち上がったルース。
「そうか、雪が緩衝材になって・・・、っ！」
後ろからギアノスが飛びかかってきた。
それに気づいたルースは横にサイドステップでかわす。
そして自らの武器、アサシンカリンガを抜いた。
「・・・あんたらなんかに、負けてられないのよ！」飛びついてきたギアノスは横にいる。
サイドステップの振り向き様、横なぎに剣を振るい、ギアノスの体

を切りつける。
のけぞるギアノスを追うように、飛びかかってさらに切りつける。
一撃、二撃、三撃。
ギアノスの鳴き声が小さくなっていく、弱っているのだろう。
「これで！」
目の前の一頭にトドメの一撃をうつ瞬間。
「！？」
ギョワァ！！
なんと更に真横からもう一頭のギアノスが飛びかかって来るのが視界の隅に映った。
ヤバい、これはかわせない・・・
ルースは、死にかけの一頭に攻撃をして倒しはしたのだが、剣を振り切ってしまっているために、飛びかかってきた一頭の攻撃はかわせない。
ガード！・・・間に合わないか！
ルースは瞬間的に身構えた、来るべき衝撃に備えて。しかし飛びかかってきたギアノスは突然軌道を変え、真横にふっとんでいく。
ルースは何が起きたのかわからず、ギアノスを目で追うことしか出来なかった。見ればギアノスの頭と体に、1本づつ矢が突き刺さっていた。

目の前のギアノス、4頭。倒れているルースには1頭、でも離れた距離にいる。1人でなんとかできるだろう。
それなら・・・
まず4本矢を取りだし、弓に同時につがえる
縦に並んだ矢。
ギョワギョワ威嚇をする4頭を狙い、弓を横にする。絃を引きながら移動、4頭の視線を釘付けにし、間合いを取った。
ギアノス達は警戒している。

しかしラットは何もしない、矢をつがえたままだ。
次第に、警戒していたギアノスは我慢できなくなっていた。
突然、仲間の一頭がラットに飛びかかった！
仲間につられたギアノス達も次々に飛びかかった。
その刹那。
・・・ここだ。
ラットは構えた矢を一斉に放った。
弓使いは非常にデリケートな戦い方をしなければならない。理由は２つ。
１つ、矢の最大威力。
矢の一本一本の威力は他の武器の一撃に比べると、かなり弱い一撃だ。
だから一回の戦闘で放つ矢の数は、百や二百なんてものじゃない。
それだけの本数を敵に当てるには時間がかかってしまう為、より敵の攻撃に晒される時間が増えてしまう。その為、敵の攻撃が当たらない間合い取りは、弓使いの基本戦闘技術なのである。
２つ、有効射程距離。
一撃の威力は確かに弱いが、放つ矢の射法によってベストな射程距離が決まっており、その威力を倍増させることが出来る。
矢の威力とは矢の回転力、つまり有効射程距離とは、その最も矢に回転がかかる距離の事を言うのだ。
例えば、今ラットが放った拡散矢。
一度に複数の矢を横に構えた弓から放つことによって、広範囲に矢を放つことができ一度に複数の敵に攻撃を与えられるが、その一方で一本一本にかかる回転力が弱く、近くにいる敵には絶大な威力なのだが、遠くの敵には威力が極端に低いのが特徴だ。

ラットは飛びかかってきた全てのギアノスに矢を当てたのだ。
全員頭に当たって・・・いない。

一頭だけ体に当たっていたらしい、フラフラと立ち上がった。
「ん・・・」
ギアノスはやられた仲間を見て、踵を返して逃げ始めた。
しかしその先には。
「！」
一頭のギアノスとルースが戦っていた。
それを見たギアノスは、仲間に加勢しようとしたのか、ギアノス独特の飛びかかる仕草をした。
やらせない・・・
考えるより早く体が動く。矢を1本引き抜き、弓につがえた。
この距離なら、拡散の威力は低いし、矢が広範囲に散らばるため一本以上当てる事は難しい。
それなら・・・
拡散矢を放つ時の倍、絃を引く。
ルースにギアノスが飛びかかる瞬間。
狙い済まされた、まさしく必殺の一撃が音もなく風を切った。
ギアノスがルースにその鋭利な爪を立てる刹那、矢は直線の軌道で横からギアノスの頭を貫いて、埋まった。
クーネレラカム最強の射法、貫通矢。
通常の矢の何十倍もの回転をかけられた矢は、モンスターのどんな強靭な鱗や肉体でも貫く。
クーネレラカムは使用者を選ぶ。
絃の張りが強く、並のハンターでは引く事すらままならない。
しかしその強靭な張りの絃から放たれる矢はまさに風のごとく。
これが風の神を名に冠する由縁であるのだろう。

洞窟の巣を制圧し、私達は山頂に向かっていた。
（・・・私が一頭倒す間に4頭も倒すなんて・・・、しかもそのう

ち一頭は、あんなに遠距離から狙撃して倒すなんて・・・）
あり得ない、とルースは小さく呟いた。
「・・・？なんか言ったか？」
後ろからラットさんが、私に話しかける。
「いえ、何でもないですよ」
山頂に向かう最中はそればっかり考えていた。
（・・・私も、いつかあんなハンターになれるのだろうか？）
自分が目指すものは、あまりにも大きすぎるのではないかと、先ほどの戦闘で痛感した。
これが、ＨＲ９。
わかってはいたが、とても遠い・・・。
一人悶々としながら、ルース達は山頂を目指して雪の坂を歩いていった。

そのさん（後書き）

少しの暇潰しにでもなってくれたでしょうか？
作者はびくびくしてめちゃめちゃ緊張して書いています。
まあ実は第４話も執筆途中ですが、ルースが思うように動いてくれない困った子です。
ちなみに作者学生につき春期の部活合宿中です。
ケータイは持ってきていますが、皆に隠れて書いているから、バレたら怖いです恥ずかしいです・・・。
以上、駄文でした。
・・・更新、出来るかなぁ。

そのよん（前書き）

ラットには二つ名があります。
作者は考えてはいたものの、完全に出すタイミングを逃しましたのです。
ラットはまあ英雄クラスなので、実際ゲームじゃああり得ない戦いをさせたいです。
それを見たルースが成長して、いつか英雄クラスに！なんとか育成計画ですね。

そのよん

冷たく澄みきった山頂の空気は洞窟にはない匂いを感じる。
俺達は洞窟を抜けて山頂付近にたどり着いた。
そこには2匹ギアノスがいたが・・・。
「ラットさん、ここで見ていて下さい。」
ルースはそう俺にいった。「これでも私はＨＲ３です。２匹くらいなら私一人でも倒せます」
・・・そうだな、一回実力を見てやる事も大事だろう。
「わかった、自分のスタイルでやってみてくれ」
俺はガンナーだが、ガンナーだからこそ剣士の立ち回りや攻・逃の切り替えのタイミングなど、ガンナーから見た剣士の動きを教えることができる。
いや、まあ勿論細かく片手剣の使い方や型を指導する事は出来ないけど。
「はい、行ってきます！」やる気がみなぎっているな、一体どうしたんだ？

駆け出したルースにギアノス達は気付いた。
縦に並んでいたギアノス達の、手前にいたギアノスに、ルースは狙いを定めた。剣を抜きながらギアノスの頭に飛びかかる。
しかし初手はギアノスにかわされ、二体とも大きく左右にとんだ。
挟み撃ちになる形となったが、ルースは冷静に最初に狙ったギアノスを狙い突進する。
「はあっ！」
飛びかかり、頭を切りつける。
「ギョワァ！」

のけぞるギアノス。
追撃の為に前に走り続ける、が。
「っ！」
後ろから飛びかかってきたもう一頭のギアノス。
ルースは気配でそれを察知、横っ飛びでそれをかわす。
同時に受け身をとり、二頭のギアノスに向き直った。「まだまだ！」

・・・ＨＲ３の動きなのか？ルースは意外と俊敏な攻撃をする、まるで双剣使いのように速い。
ＨＲ３の駆け出しでこの動きができるハンターはなかなかいない。
本人の才能か、はたまた努力の結晶か。
・・・しかし、まだまだ動きや立ち回りが甘い。
群れのギアノスが相手なら、絶対に多対一の戦闘はなるべく避ける。
さっきは、敵の挟み撃ちにあってもルースは上手く立ち回ったが上位以上のランクを目指すなら、そもそも挟み撃ちの状況になること自体がいただけない。
しかしルースはＨＲ３のハンターだ。
ＨＲ９の俺の目線で見ればまだまだ、しかし普通のハンターとして見ればランクに見合わない良い動きをしているのだ。
これからゆっくりと成長していくのだろうか・・・。「おっ」
どうやら終わったようだ。どれ、指導いたしましょうか・・・。

「これで七匹か、まあ良いペースだな。さて、ちょっとアドバイスいいか？」
ルースに、戦闘を見ていて思った事を伝える。
主に立ち回りの事、少し右側から来る攻撃に反応が遅い事など。
ルースは何回も頷き、感心したように俺の話を聞いていた。

「ラットさんは本当に凄いです・・・、右側からの攻撃がかわしにくいことなんか、気が付きませんでしたよ」
「ん、微妙にだから自分でも気付かなかったか？まあ少し気をつければ大丈夫なレベルだから」
簡単なアドバイスだが、まあ参考にでもしてくれたらいいだろう。
「・・・次は俺が一人で戦おうかな、ちょっと見てもらいたいものもあるし」
「見てもらいたいもの？」「一回自分で見てもらって、自分で気付いて欲しいかな。んじゃ、ネフェル山の最も高い所へ行こうか」
「はっ、はい！」
見て気付いてくれ、そして学んでくれ。

山頂は見事に晴れ渡っていたが、夜中だからか気温がとても低かった。
「んぐっ」
ルースがホットドリンクを一気に飲み干した。
・・・ちなみにこれで合計5本目だ、実は洞窟での戦闘が終わった後もルースは2本飲んでいた。俺はまだ1本しか飲んでいないのだが。
「それは・・・体が暑くなりすぎて、逆に死ぬんじゃないか？」
「大丈夫です！暖かくて損な事はありません！」
ルースは苦虫とトウガラシを空のビンに入れ、かき混ぜながらそう言った。
「はい、ホットドリンク完成しました～」
笑顔でビンを空に掲げ、その後ポーチに入れた。
俺達は今、休憩中だ。
ルースが自分の生命線であるホットドリンクを調合したいと言うので、仕方なく休んでいるのだ。

ちなみに、近くにギアノスが普通にいるのだが、今いる場所は崖の陰だし、風下なので気付かれてはいない。
ギアノス達は何をしているのか、５匹で纏まってなにやら食べているように見えた。
目を凝らすと、雪の上に横たわって血まみれの毛むくじゃらの草食獣、ポポが見えた。
恐らく逃げ遅れてやられてしまったのだろう、大きさから見て子どものポポのようだ。
こんな所で弱肉強食の様を見られるとは思ってなかった。
ギアノスが食事中の今が一番のチャンスだから奇襲したいのだが、それではルースに戦闘のテクニックを見せてやることが出来ない。
だから足止め、という訳だ。
（俺が教えられる最高のテクニックだから、万全の状況で披露したいからな）
座っていたルースが顔を上げた。
「調合、終わりました」
うん、と返事する。
「・・・ラットさんはハンターになって何年くらいでＨＲ９になったんですか？」質問してきたルースの方は見ず、ギアノス達に目を向けながら答える。
「・・・Ｇ級に上がったのが大体６年前位だ、確か２年位前にＨＲ９になったんだと思うよ」
「ハンターになったのは？」
「１０年前に養成所を卒業した」
「・・・え？たった４年でＧ級ハンターになったんですか！？私は今年でハンター３年目ですよ！？」
・・・確かに俺は同期のヤツらより出世は早かった。まあ俺は最初から流れとして行動して、他の同期のヤツらよりも遥かに多く依頼をこなしていた。
その内、ある村に旅していた時に近くの火山帯にアカムトルムが現

れて、それを怖がりながらも一人で倒しに行って・・・。
いつの間にか俺はG級ハンターになっていた・・・。その時に背中の相棒はレラカムトルムになった。
G級ハンターとして村々を流れて行ったら、今度はある豪雪地帯でウカムルバスが現れて、さすがにそれはギルドの派遣ハンターと共に討ち取った。
ちなみに、その時手に入れたウカムルバスの体内にあった謎の宝石がレラカムトルムと共鳴して、その現象を鍛冶屋のおっさんに聞いたら「この武器は、まだまだ強化できたのか・・・」と言って、一週間がかりで仕上げてくれた武器が、現相棒、クーネレラカムだ。
ウカムルバスを倒した俺と他のハンター達は功績を認められて、ギルドマスター直々にHR9をめでたく授けられた。
こうして俺は、ハンターにとって名誉である二つ名つきのHR9ハンターとなったのである。
「・・・という訳だ」
ルースの方は見ずに、ギアノス達に集中する。
「凄い・・・二つ名つきハンターでしたか」
「凄いのかもしれない、だけど二つ名はG級ハンターなら誰でも持っている。下手すると上位のヤツだって持っているモノだ」
「それでも、私なんか全然遠い・・・」
「遠くない、努力すれば必ず君もG級になれる」
「それは・・・ラットさんに才能があったからなんじゃないんですか？」
・・・何を言い出した？
「私はまだHR3、上のランクにはもちろん行きたいです！行きたいけど・・・ラットさんを見ていると到底無理な話に思えてきちゃって・・・、何が『両親の様なハンターになる』ですか。笑っちゃいますね・・・、実際は遥かに高い雲の上の世界の話なのに」
・・・悩んでいるのだろうか、ルースは顔を伏してしまっている。
その時、ギアノス達が動いた、どうやら食事は終わった様だ。

「・・・ここから見ていてくれ、そして学んでくれ」こういう時、
俺にはこういう事しか出来ないが、けどわかってほしい。
努力して出来ない事なんて、無いんだという事を。

新人の頃、俺もそんな事を思っていた。
G級は、雲の上の世界の話だ、自分ではたどり着けない世界なんだ、
という事を。
でも、その事をある人に相談したら、優しくこう答えてくれた。
『なれないと最初から思っていたら、本当になれないものなのよ。
頑張って、頑張って、努力して。人はそうやって成長していくもの
なんだから。決してG級は遠いものじゃないの、かといって、楽な
道でもないわ。・・・フフフ、私みたいにG級になりたいなら、努
力なさい、ラット。なれるかなれないかは、あなた次第よ』
そしてその人は、訓練所のランポス達相手にあるテクニックを俺に
見せてくれた。『さあラット、あなたにこれが出来るかしら？これ
が当たり前になる頃には、あなたは立派なハンターになっているわ』
無邪気な笑顔で、俺にそう言った。
今では当たり前の様に出来るようになったそれを・・・なんの因果
か、俺はルースに見せようとしている。はい、上手くやってやりま
すよ。
俺がいた養成所の弓科教官であり、この世界で5本の指に入ると言
われた至高の弓使い、アリス・アンジェラの様に。
ルースの、母親のように。

今の俺は、あの人に近づけているのだろうか？

私は、ラットさんによくわからない気持ちをぶつけてしまった。
文句？愚痴？
くだらないことでむきになった気がして罪悪感が生まれてくる。

でも、私とラットさんではキャリアの差、実力の差がとても離れている。
私はそれが不安だった。
『私は、あのレベルに到達できるのか？』
うじうじと、ループ状態。・・・いけない、ラットさんの戦いを見ないと。
ラットさんは見て学んでくれ、と言っていた。
ラットさんはギアノス達の前に立ち、弓を展開した。威嚇を始めるギアノス達を尻目に複数の矢を抜き、弓につがえる。
早い・・・、まるで、呼吸をするみたいに簡単に一連の動作を終わらせた。
そしてギアノスが動き始めた時、ラットさんは矢を放つ。
？
放たれた矢は複数のギアノス達の横を通過した。
外した？
ギアノス達は矢を意識して自慢のフットワークでラットさんを撹乱しようと動き回る。
ラットさんが外した・・・？
予想外の出来事だ、絶対当てると思っていたのに・・・。
さらにラットさんは複数の矢を放ち続ける。
一、二、三発。
その全てが拡散矢なのに一本もギアノス達に当たらないのだ。
依然、ギアノス達は軽快なフットワークでラットさんの周りを飛び交っている。まさか・・・という思いが頭に巡る。
ギアノス5頭を同時に相手するのは、ラットさんでも厳しいのではないか？今、危険な状態なのではないか？
私は武器を抜き、ギアノス達に向かって、走り始めた。ラットさんに加勢するために。
その刹那それは、起こった。
ラットさんの周りを飛び交っていたギアノス達5頭がピタリっ、と

合わしたかのように縦に5頭が整列したのだ。
ラットさんはその瞬間を見逃さない。
弓に一本の矢をつがえていたラットさんは、整列したギアノス達目掛け貫通矢を放ったのだ。
瞬きすれば、放たれた矢は、全てのギアノス達の頭を貫いた。
決着は、あっけなかった。

ルースは唖然としてしまった。
それと同時にある考えが頭に浮かんだ。
（ラットさんはギアノスを縦に並ばせる為に、わざと矢を外していた・・・？）それは、完璧に計算されていた一撃。「ルース？」
いつのまにかラットが歩いてこっちに来ていた。
「お、お疲れ様です・・・」まだ驚きが隠せない。
「ラットさん、まさか全部計算してギアノスを？」
「ああ」
ラットは当たり前のように「わかったか？これがハンター共通の奥義だよ」
ラットは、笑顔でルースに話す。
「奥義・・・？」
「奥義というか、戦闘のテクニックだ。敵を操るんだよ。」
それは、一流のハンターの経験から産み出される技。例えば、将棋や囲碁の強者。
彼らは深い読みあいの勝負の最中、一つのことを考えて一手を指す。
それは『いかに相手に自分が誘導した手を打たせるか』だ。
いわゆる、『相手の裏をかく』ということとも言える。
相手の一手を読みきった上で、その手に有効な罠をはる。
今回の場合。
ラットは敵の動きを操作して、自分の思った通りの戦況を作り出し、貫通矢で止めをさした。
外したかに見えた攻撃は、牽制の一手。

ギアノス達は軽快にフットワークを刻んでいた訳ではなく、ラットの牽制の結果、動き回ることしか出来なかったのだ。
これは、はっきり言って極端な例だ。
しかし敵を操るという意識は、思い通りの戦いをする上でとても重要な事なのだ。

「敵を、操る・・・？」
「ああ、そういう事だ」
「そんなの・・・無理ですよ・・・。一流のハンターだからそんな事ができるんですよ」
ルースはラットに言う。
「私には・・・無理ですよ」
「すぐに無理だとか・・・簡単にそんなこと言うな！！」
驚くルース。
「違うんだよ、ルース。一流だから出来るんじゃなくて、これが出来るから一流になれたんだ。」
ルースの瞳を真っ直ぐ見つめる。
「・・・俺もな、養成所時代の教官に同じものを見せてもらったんだ。その頃の俺も、G級ハンターになんかなれないと思っていたんだよ。」
ルースも黙ってラットの瞳を見つめ続けた。
「俺は、流れの仕事をこなす傍らでこのテクニックを意識し、磨き続けた。そしたら・・・、いつの間にか4年がたって、俺はG級になったんだ」
ルースの両肩をつかみ、
「・・・わかってくれ、最初から一流のヤツなんかいないんだ。皆、悩んで努力して苦しんで成長して、そしてそこで結果が出るんだ。悩んだ結果諦めたじゃ、成長なんてしないんだよ」ルースの肩は震えていた。

んじゃ、ラスト行こう。
そう言って、ラットさんは歩き始めた。
「悩んだ結果諦めたじゃ、成長しないんだよ」
頭に反芻する、その言葉。少しでも悩んでネガティブになった自分が恥ずかしい。
目からこぼれる涙は拭いて、先に歩き出していたラットさんを追いかける。
・・・決めた。
私はこの人についていこう、そしていつか、肩を並べられる存在になろう。
ルースには、また目標が増えてしまった。

この約2時間後。
二人は無事クエストをクリアし、村に帰ってきた。
竜車を運転するラットの隣に座り、ルースは眠っていた。
幸せそうな寝顔だ。
可愛さのあまり、つい頭をなでてしまった。
「ん・・・、ぅん・・・」よく眠っているようだ。

「・・・？そういえば、ルースは何で俺のＨＲ知っていたんだろ」

・・・まあいいか。
明日は足りない道具の買い出しだ。
ルースに案内でもしてもらおう。

・・・次は何処に向かおうかなぁ。

そのよん（後書き）

次回

シアーマタの街編

姫とネズミの旅行計画

・・・未だに書くことに緊張しています。
こんな下手な小説を見てくださる読者様に、最大級の賛美を！・・・・
本当にありがとうございます。
この小説が皆さんの一時の暇潰しになればいいなぁ。

シアーマタの街編　姫とネズミの旅行計画　そのいち（前書き）

シアーマタの街。

ドンドルマから地方へ行く際の中継地点となる街。
様々な地方の特産品が数多く取引されている、貿易都市。
街の周りに壁があり、そこから外は森が広がってはいるが、ある程度整備され、ちゃんと道がある。
この街に入ってくる依頼は近くにあるゾアマン密林のものが主要だが、モンスターが多発するような地域ではない。

ちなみに今回だけでは、まだラット達はシアーマタにたどり着きません。

シアーマタの街編　姫とネズミの旅行計画　そのいち

村にたどり着いたのはいいが、ルースは熟睡モード真っ最中だ。「俺は集会場に帰るとして、ルースは何処に連れて行けば・・・」
まさか俺の部屋で寝かせる訳にはいかない、一応年頃の女の子だからな。
村の入り口にたどり着いた時、誰かが話かけてきた。「おかえり、無事依頼は達成できたみたいだねぇ」
・・・関所のおっちゃんか。
実は依頼に出発するとき、このおっちゃんに竜車に乗った俺達は、なにやら意味深にじっと見つめられていたことは記憶に新しい。
ルースに聞いたら、「仕事なのでは？それより―」
と、はぐらかされたのだ。・・・ヤバい人、なのか？「あの・・・、この子の家とか分かりますか？」
ルースを指差して、訪ねてみた。
「おう、わかるよ」
おっちゃんは地図を、またもポケットから出し
「集会場の場所わかるだろ？そこから2軒先の家だ」よく村を把握しているものだな。
「ありがとうございます、それじゃあ」
俺達は足早に退散した、あまり話す事もないし。
ヤバい人なら、困るしな。
その2人が乗った竜車の後ろ姿を、嬉しそうに関所のおっちゃんは眺めていたそうだ。

さて、ここがルースの家だな。
普通の一軒家だ、まあ他の家よりかはずっと大きいが。
「ルース？ちょっと起きてくれ」

さすがに黙って家に入る訳にはいくまい。
「・・・ぅぅん、・・・なんですか・・・」
「ほら、家に着いたぞ」
「え・・・？」
ルースは周りを見渡す。
「あっ、あっ、いつの間に！？すみません送ってもらっちゃって！」
竜車からルースは降り、深々と礼をする。
「ん、いやぁいいよ別に」俺も竜車から降り、後ろに積んであった
ルースの荷物を取り出しながら
「集会場にも近かったし、ついでだよ、ついで」
ルースに荷物を渡す。
「ほい。あっ、明日の買い出し手伝ってくれないか？」
「・・・もちろんです！お供しますよ。」
「んじゃこれ。ルースの分の報酬。明日にでもカード更新に集会場
に行きなよ？」
俺はさっき集会場に寄っておいて、ルースの分も依頼報酬をもらっ
ておいた。
本当は、二人揃ってカウンターに行かなければ報酬は貰えないのだ
が、ハナカさんが気をまわしてくれて、ルースを確認した上で報酬
をくれたのだ。
「ルースちゃん、頑張ったのねぇ～。明日でいいからハンターカー
ド更新に来てって伝えといてねぇ～」
おっとりとした口調は変わらない暖かさがある。
「わかりました、何から何までありがとうございます」
「んじゃまた明日。よろしくね」
集会場に帰ろうと竜車に乗り込んだ。
「あのっ！」
ルースが叫ぶ。
「明日！、話したい事があります。大事な話です！」「・・・今じ
ゃダメか？」「ダメです、ゆっくり話したいから明日話します。そ

れでは、お休みなさい。今日はありがとうございました！」
「あ、ああ。お休み・・・」
ルースは自分の家に帰っていった。
「・・・どうしたんだ？あんなに早口になって」
・・・考えてもしかたない、俺も帰ろう。

部屋に着いた。
いつもの普段着であるガブラス皮のジーンズに着替え、上半身は裸。
一番これが寝やすいのだ。下では酒場が賑わっている、まあ今日はその喧騒に混ざる気はない。
俺は、やがて意識を手放した・・・。

翌日、俺はルースと集会場で再開し、村の案内をしてもらう事となった。
道具屋に鍛冶屋、行商のおばあちゃんなど、様々な場所を案内してもらい、足りない薬や食料類を買い揃ええた。
ちなみに、鍛冶屋には防具の整備を依頼した。
ギアノスの血が結構こびりついていたからだ。
弓の性能を強化してくれるあのビン６種類も必要個数買ったし。
「ありがとうなルース、これで次の旅の準備が出来たよ。お礼になんかおごるぞ？」
「いえ、結構です・・・。それより、話があります」集会場に戻ってきた俺達は、酒場のテーブルに座っていた。
「・・・昨日言っていたことだよな。いいよ、聞かせてくれ」
ルースは、ゆっくり息をすいこんで
「ラットさん。私を旅に同行させてください」
・・・
「本気、なのか？」

「・・・はい」
ルースの目には、強い意志・・・。
「正直、オススメできない。時にはルースが嫌いな寒冷地帯にも行く。場合によってはそういう場所で野宿する時もあるし、道中モンスターにも襲われるぞ」
「覚悟の上です」
・・・マジな顔だな。
「良いことなんかない、大変な事だらけだ。そうだ、ルースはこの村の常駐ハンターだろ？村を空けることなんか出来ないだろ」
「それは大丈夫よ～」
奥からハナカさんが出てきて、こう告げる。
「昨日の夜、ルースちゃんから全部聞いたわ～。実は、前から常駐ハンターを増やそうと思って、中央ギルドの方で募集してたの～。そしたら、まだ新米さんだけど常駐ハンターになってくれる人が中央ギルドから派遣されて、明日には来てくれる事になってたのよ～」
昨日二人が依頼中に、その手紙が来たんだけどね、
だそうだ。
「だからルースちゃんに、昨日そのことを話したの。ルースちゃんが旅に出たいって話を聞いてからね」
ルースが後を繋げて
「だから村の事は心配ありません！お願いします！」だが・・・。
「・・・一応、ね」
俺はルースに質問してみた。
「なんで俺の旅に同行したいと思ったんだ」
それを聞いたルースは
「このままじゃいけない、強くなれないと思ったからです」
ハッキリとそう言った。
「・・・ラットさんの様な、強いハンターになりたい。私は、いつかラットさんと肩を並べてみたい！」
ルースは叫ぶ。

「私は絶対にG級、ＨＲ９ハンターになります！・・・その為に、私を鍛えて下さい！！私は、ラットさんについていきたいんです！！」
椅子から立ち上がって、俺に深々と礼をした
「お願いします！！」
・・・デジャブだねぇ。
それはさておき。
「・・・自分の身は自分で守れ。いざというときは自ら退け」
俺はルースに言う
「一緒に行くんなら、それがルールかな」
沈黙の後。
「・・・ありがとう、ございます！」
涙はでていたが、とても可憐な笑顔だった。
まあ俺だって鬼じゃないし、涙目の女の子に男は弱いモノだということで、無理やり納得しておこう。うん。
こうして、俺とルースは仲間になった。

・・・てか流れに身をまかすのが、俺のスタイルだからね・・・

そうして3日後。
俺達はノロップ村を出発した。
村の入り口に見送りに来てくれた村人一人一人に、ルースは丁寧にお辞儀をしてしばしの別れを告げていた。
・・・あの関所のおっちゃんは号泣でエールを送っていたが、結局あの人はどういう人だったんだろう？
それにしても、ルースは村人に慕われていたんだな。だって、村人全員がここにいるそうだもんｂｙハナカ。・・・何時間、かかるか

な。

「・・・もう寂しくないか？」
「・・・全然ですよ、私が決めた道ですからね」
「・・・本音は？」
「少し・・・寂しいです」「大丈夫だ、すぐになれるよ」
・・・
「・・・なあ、それは逆に暑いんじゃないのか？」
「全然です」
・・・ジャケットの上にコート、マフラー、耳当て、手袋をして、さらに村で俺が買ったポポ皮の毛布を膝にかけて湯タンポを抱いて、ルースは俺の横に座っている。
「・・・そんなに寒いなら、竜車の後ろの幌がかかった荷台にいればいいのに。少なくとも、風は当たらないはずだよ」
「いや、ここにいたいんです」
ルースは続けて
「ラットさんと一杯お話がしたいんです。・・・いいですよね？」
そう言うと、俺の方に顔を向け、可憐な笑顔になった。
「そうか？、まあ別にかまわないよ。んじゃ俺から話のネタを提供する。これからの事を話すよ」
前におっちゃんからもらった地図を、俺らが座っている間に広げた。
「まずここがノロップ村」地図の右側中央を指差す。「・・・そしてネフェル山」
つー、と指を動かして、村の横側にある山を次に指差した。
「今は、山に向かう道の途中。つまり村と山の中間のここだ」
俺は元々持っていた地図も開いて、上においた。
「これから向かう予定の場所はシアーマタだ、つまりここ」
俺は、ネフェル山から大体地図では人差し指くらいの長さに位置す

る場所を指差す。
「ここですか？山をこえてずいぶんと移動距離がありますね。ということはかなりの間、竜車に乗っていないといけませんね」
「その通り、この場所から約1週間程はかかる距離だ」
「・・・長いですね」
苦笑いのルース。
「しかし、道中村が1つだけある。そこでまた準備をしてから、シアーマタに行くつもりだ」
「ちなみに、その村へはどのくらいでたどり着くんですか？」
「・・・まあ3日かな」
俺は苦笑い。
「でも俺は嬉しいんだ」
カイナの手綱を引く手を強くする。
「これまでと違って、話し相手がいるからね」
ルースに笑いかけた。
さっさと山越えちまうか。カイナはスピードを上げて、山に向かって走った。

「・・・もうすぐで山を越えるから、後少しの辛抱だ。頑張ってくれ！」
後ろの荷台に座って必死なルースに、そう告げた。
村から山まで、３０分。
山の中にある道を通り、現在山の反対側の道を下るまでにかかった時間、―４時間半。
その間ルースは後ろの荷台に移動し、必死で寒さと戦っていた。
「はい・・・」
返事をするのでやっとの状態か。
「まってろよ。山を越えたら、いつぞやにどこかの村で買った特産キノコキムチでキムチ鍋を作ってやる！」

昼頃に村を出たのだが、今はもう日も暮れて夜の寒さが身にしみる。
山の中は風が強いが、ふもと付近は風もなくそれほど寒くもなくなるのだろう。その時にキムチ鍋を作って暖って、旅1日目が終わりそうだな。
よし、そうしよう。
そうとなったら・・・
「カイナ、頑張ってくれ！今回はお前が好きな草とか一杯買っておいたからな。ふもとに着いたら、飯にするからな？」
俺は更に手綱を引いた。
・・・まあ一番の難関だと思っていたから、今の所予想通りに事が運んでいるようでよかった。
もう少しだ。
俺は、今はもういないルースの席に置いておいたポーチからホットドリンクを出し、一気に飲みほした。
ふと気になって後ろを見たが、安心した。
超厚着のルースの周りにはちゃんと、空になったビンが何本も何本も転がっていたからだ。

川の水を鍋にいれ、火にかける。
この辺の水は山からの雪解け水だ。
冷たくて、そのまま飲んでも非常に美味しい水だった。
ちなみにもう大タルで2杯はくんで荷台に積んである、大切な飲み水だ。
沸騰した所で野菜投入、これがいいダシとなる。
野菜は、ノロップ村でとれた特産品を一杯村でもらった物だ、種類は様々。
そして野菜がいい感じに煮たった所で、いよいよ今回の主役、特産キノコキムチを鍋に大盛りにして入れた。

後は乾燥したポポの肉を入れてもう一回煮たたせれば・・・。
「完成、特産キノコキムチ鍋！」
寒い冬に、どうだい奥さん？
「ルース、できたよ。早く荷台から降りて食べよう？」
足元をふらつかせて荷台から降りたルース、格好はあの超厚着のままだ。
「うわ、美味しそう・・・」
鍋の周りに俺達は座った。「いただきます！」
小皿とはしを渡したら、早速食べ始めたルース。
「・・・熱っ、辛いぃ、でも・・・これは美味ひぃです～」
「・・・ゆっくり食べような。どれ、俺も」
まずは良く煮られた野菜類から。
「ん、いける。意外と良い味出すんだな、乾燥肉は」「体の芯から暖まるのがわかります・・・、美味しいですよラットさん。料理がお上手なんですね」
「ん～、要はテキトーに野菜を入れて煮ただけの物だし、上手って言えるのかなぁ。まあ美味しく出来て良かったよ」
カイナにも、さっきエサである枯れ草を一杯出してやった。
幸せそうに食べていたが、なんだか疲れていたような感じがした。
・・・すまんな。明日からはゆっくり移動しよう。

・・・

「ご馳走様でした、美味しかったです！もう体がポカポカですよ」
俺も体がポカポカして、むしろ暑いくらいだ。
「おう、お粗末様。食器は俺が川で洗ってくる」
「あ、それなら私が・・・」
「駄目だよ」
食器を持ったルースを、俺が制した。
「・・・せっかく暖まった体を、川の冷たい水で冷やしてどうする

？食器はいいから、今にも消えそうなその火を延命させといてくれ」
「え？あぁ！」
もう今すぐにでも消えそうな火に、慌てて近寄るルース。
「・・・頼んだよ～」

あ、決めてなかったなぁ
「・・・どこで寝ようか？」
いつもは1人だったから適当に荷台で寝ていたが、ルースがいると話が違ってくる。
「あ、あのぉ・・・」
おずおずと、ルースが話しかけてきた。
「私が、外で・・・」
「いやいや、論外だから。寒さが苦手な自分をもっといたわりな」
苦笑い、気持ちは嬉しいが。
「ん、ルースは荷台で俺は外で適当に寝るよ」
「いや、私はラットさんにお世話になっている身分です。ここは、ラットさんが中で」
「いや、だから・・・」
「いえいえ、ラットさんが・・・」
・・・話が終わらない。
これ以上話してもラチがあかない。
「んじゃあ、荷台で2人で寝るか。少し荷物とかで狭いけど、なんとか2人並んで寝れるだろう」
ハンターとして睡眠はとても重要だから、ルースには場所を広く使ってリラックスして睡眠をとって貰いたかったが・・・。
まあお互いに譲り合っていてもしょうがない、ここは妥協しよう。
それを聞いて
「一緒に・・・？」

ボンッ！と赤くなるルース。
「・・・？、大丈夫か？」「あ、あ、えーと、・・・ふつつかものですが、よろしくお願いします！」
「・・・何が？」
話し合い、終了。

こうして、ルースが旅に着いてきて1日目の夜はふけていった。

シアーマタまで、まだまだ時間がかかるだろう。

シアーマタの街編　姫とネズミの旅行計画　そのいち（後書き）

どうでしたでしょうか？
こんな拙い文章を我慢して見てくれる方は神なのでしょう、本当にありがとうございます。
もっと文章を上手く書けるようになって、皆様にもっと上手い小説を見せたいです・・・
以上、駄文でした。

あ、ちなみに作者はまだ部活の地獄合宿真っ只中にいます。
・・・死にそうです。

そのに（前書き）

サキサス村
比較的小さな村だが、ミハエル牧場のクヨクヨーグルトが大陸的人気。
ドンドルマの食堂でも、ミハエル牧場のこのヨーグルトが使われた事がある。

そのに

そんでもって、3日目の昼頃。
ちなみに、2日目は草原を真っ直ぐ一本道だった。
まあ2人旅ということもあり時間はあっという間に流れたのだが、
ああも代わり映えのない景色が延々と続くと飽きてしまう。
しかしまあ、山一つ越えただけで大きく気候が変わってしまうのを
眺めるのはいつも楽しく思う、雪景色も今では緑一色だ。
まあ、そんな訳で2日目は過ぎていった。
そしてまあ、翌日の朝早くにまた出発して今に至る訳だ。俺達は、
草原を抜けて密林地帯に入った所にいる。
「・・・なあルース」
俺はルースに話しかけた。「はい、なんですか？」俺の隣で地図を
見ていたルースは、顔を上げた。
「もう知っていると思うけど、俺達は密林地帯にもう入っている」
「はい。もちろん知っていますよ？それがどうかしましたか？」
「んとね。この辺モンスター出そうだから、ちょっと防具に着替え
てきてくれないか？」
「あ、えと・・・いいですけど・・・」
なにやらモジモジしはじめたルース。
「・・・着替え、覗かないでくださいね？」
なんだ、そんなことか。
「大丈夫、そんな趣味もないし興味もない」
性欲ならぬ制欲だな。
昔なら俺も少なからずそんな興味もあったんだが。
「・・・なっ、なんかそれはそれでショックです・・・」
小声で何か呟くルース。
「ん？何？」
「いえ何も言ってませんよ？、着替えて来まーす」

そう言うと、ルースは荷台の中に入って行ってしまった。・・・
まあ本当は俺も防具に着替えたい所なのだが、ルースは竜車を運転出来ないらしく、俺が着替えている間は竜車は止まってしまう。
そうすると、止まった所にカイナの匂いが残ってしまう。
ギアノス、いやこの辺はランポスか。
あいつらにカイナの匂いを覚えさせたくない。倒さない限り、あいつらはずっと追っかけてくる。
できれば旅の道中、楽に移動したいからな。
「・・・着替え終わりましたよ。竜車から降りて見張りましょうか？」
荷台から顔を出すルース。「いや、きっと出ないだろうし、多分出てもランポスくらいだから、隣に座ってていいよ？まあ気楽に頼む」
「・・・気楽に、ですか。まあ複数出たら、さすがに加勢してほしいですけどね」
苦笑いのルース。
結果モンスターは一匹も出ず、この日も安全に夜を過ごしたのだった。
予定の村に着いたのは、翌日の夕方頃だった。

「着いたか・・・。一応紹介な？ここがサキサス村だよ、ルース。シアーマタとノロップ村の中間くらいに位置する村だ」
「・・・やっと着きましたね。でも3日って、意外と早く過ぎました」
「ルースは、甘いもの好きか？」
「とてもとても大好きです。なんでですか？」
俺達は、村の人に竜車置き場まで案内してもらう間に、そんな会話をしていた。「実はこの村、ドンドルマでも有名なクヨクヨーグルトの名産地なんだ。ノロップ村で貰った物に果物があったよな？フ

ルーツヨーグルトにして、是非食べようじゃないか」
ルースは、自慢の可憐な笑顔を俺に見せてくれた。
「それは・・・最高です！」

「ここが、牧場か・・・」「村のほとんどが牧場なんですね。なんか広くてステキです」
確かに素晴らしい景色だが。
俺達は村の中心部の牧場に来ている・・・。しかし、あそこにいるファンゴのようなゴツい牛どもは一体なんなんだ。牧草地が広がる良好な景色で、あいつらだけがなんか浮いている。
違和感を覚えつつ、牧場の近くにあった小屋に入る。「いらっしゃいませ！」
小屋の中に入ると、可愛らしい女の子が出迎えてくれた。
１１才くらいの子どもだ、親の仕事の手伝いかな。
「ミハエル牧場乳製品売り場へようこそ、綺麗なお姉ちゃん達！」
俺達にウィンクする女の子。
「ありがとう。ここは、クヨクヨーグルトを売ってるんだよね？」
ルースは女の子に訪ねた。「はい。お客さん達はラッキーです！」
そういうと、奥から何やら大きな箱を取り出してきて「実は、ちょうど出来立てを店に並べる所だったんですよ？」
ドン、と床に置いて、
「本当は数量限定でお一人様一本までなんだけど、ラッキーなお客さんには特別サービス！好きなだけ買っていってね？」
箱の中には、ヨーグルトを牛乳ビンの様なものに入れた物が、沢山入っていた。「んじゃ、お言葉に甘えて」
俺は３本、ルースは２本。
値段は、合計１０００ゼニー。「はい。確かに１０００ゼニー、確認しました～！」
俺達はお金を払い、せっかくだから、一本開けて食べてみようとし

た。
「あ、スプーンいりますよね。2人分用意しますよ？」
「ありがとう」
奥にパタパタと走っていく女の子。
「・・・小さいのに働き者なんですね、あの子」
感心した眼差しで、ルースはそういった。
「・・・そして、かなり力があるな」
「え？」
さっきあの子は、ヨーグルトが入った箱を持っていた。
沢山ビンが積まれていたし、かなりの重量のはずだ。実際俺も持って確かめたが、かなり重たかった。
それをあんな小さい女の子が、普通は持てるはずがない。
「・・・同業者、かもな。それとなく聞いてみるか」あり得ない話ではない。
ハンターとして、養成所で特殊な訓練をちゃんと積んで卒業すれば、それだけの力を得る事となる。
パタパタと音がして、奥から女の子が出てきた。
「はい、スプーンです。うちのヨーグルトは美味ですよぅ？」
「はい、いただきます」
「頂きます」
ヨーグルトを食べた、なんと。
「うまい・・・。程よい甘さに、なめなかな舌触り。これは百点だな」
「本当です、美味しすぎて感動しました！」
そう感想を女の子に言うと「ありがとうございますね。牛達も喜びます」
と言った。
「・・・え、乳牛なの？あのゴツい牛」
「はい、そうです」
俺は、ちょっとあの牛達を尊敬した。

ごめんな、少しでも悪く言って。

「美味しかったよ、ご馳走様」
「とても美味しいヨーグルトでした」
俺達はヨーグルトを食べ終えた。
「喜んでいただけたようで。お二人はハンターさん？」
女の子に尋ねられた。
「おっと・・・。確かにおれらはそうだけど、なんでわかったんだい？」
「一応、普段着なんですけど・・・」
女の子にそう言うと、スグに答えが返ってきた。
「ん～、一番はそこのお兄さんですよ。・・・多分ハルバリさん、ですよね？」「！。驚いたな、俺を知っているのか？。名前じゃなくてファミリーネームなのは少し気になるけど」
「やっぱり！・・・名前で呼んだ方が、よろしかったですか？」
女の子が礼をする。
「初めまして、ラット・ハルバリさん。私はサーシャ、サーシャ・ミハエル。ここの牧場の管理人であり、ＨＲ５のハンターでもあります」
「えぇ？！、ＨＲ５！？」
ルースが驚いてサーシャに言った。
「そんなお年で、もう？すごいわね・・・」
サーシャは苦笑いをした。「・・・まあ、多分私とあなたは変わらないくらいの年齢だと思いますよ。私は１８才です」
「えぇ！！１８才！？」
ルースはさらに驚く。
「同い年だったんだ・・・、見えないわ・・・。てっきり、まだ１２もいってないかと」

「良く言われますよ」
サーシャはポケットから
「ハンターカードです、お確かめ下さい」
サーシャは、カードを俺に渡してくれた。
「・・・確かに。それにしても、よく俺を知っていたな」
カードをサーシャに返し、俺は尋ねた。
「ああ。・・・あなたの名前は大陸的に有名です。ちなみに私は、昔ドンドルマであなたを見たことがありました。髪型が変わっていなかったので、すぐにわかりました」
「なるほどな」
「あの・・・、ラットさんってそんなに有名なんですか？」
「あら、一緒に旅をしているんですよね？」
「まあ、確かにそうなんだけど。あ、彼女はルースっていうんだ。・・・ルースとは、まだ3日前から旅に付き合ってもらっているだけなんだ」
「なるほど、そうでしたか。ラットさんは偉大なハンターですよ？一度、ドンドルマの中央ギルドが、古竜討伐の為にわざわざラットさんを直々にご指名したくらいなんですから」
「そんなに大した事じゃない。その日は、たまたま中央ギルドに新米ハンターしか集まっていなかったから、ＨＲが高かった俺に依頼が回ってきただけなんだ」
「でも、ちゃんと古竜を倒して帰って来ましたよね？私は、それで初めてテオの遺骸を見たんですよ？」
「古竜も倒していたんですか、ラットさん！」
「あ、ああ・・・」
俺は少し恥ずかしくなったので、とりあえず話を変える事にした。
「サーシャさんは、ハンターでありながらなんで牧場を？」
「・・・私は小さい時から養成所に行って、卒業して帰ってきたら両親が、私にここの牧場を継げ継げとうるさくて・・・。話半分に聞いていたら、私がＨＲ５になった時に父が足を悪くして、牧場を

続けられなくなったそうで。しょうがなく私が継いだのですが・・・」
サーシャは、箱に入ったヨーグルトを棚に並べながら「今では、この仕事が楽しくてしょうがありません」笑顔で俺達に話してくれた。

「それじゃあ、またお会いできる日まで～！」
俺達に手を振るサーシャ、俺達も手を振りかえす。
「・・・楽しかったな」
あの後、つい3人で長話をしてしまった。
「ええ、また会えるといいですね」
「しかし・・・すっかり暗くなってしまった」
もうすでに今は夜。
暗くて道なんか見えない、とは言ったものの、月が出て良く晴れているため以外と道は見える。
綺麗な月明かりだ。
「あ～、あの村で泊めさせてもらえばよかったなぁ・・・」
俺は呻いた。
「・・・それにしてもラットさんは、あまり過去の話をしてくれませんね」
ルースは小さくそういった。
「今日は、サーシャさんに聞くまでわからない事だらけでしたよ？」
「あ～・・・、あんまりそういう話、好きじゃなくて・・・」
なぜなら、恥ずかしいから。
「自分がやってきた事は凄い事。そう周りから言われるのは、イヤなんだよな」苦笑いで答える。
「そうでしたか」
ルースはそう言うと、俺の腕に抱きつき始めた。
「？、ルース、何を・・・」

「でも私はラットさんの凄い話、い～っぱい聞きたいです。ラットさんは実際凄い事をしているんです。自慢話だって、堂々と話しちゃってください。私は一言一句、全部聞きますよ？」俺の腕に頭をすり寄せるルース。
・・・やれやれ。
「ありがと・・・。んじゃ、少しなんか話そうかなぁ・・・」
「拝聴します」
笑顔のルース、まあそろそろ離してほしいが。
今日の夜は、そんな風に過ぎていった。
さあ、シアーマタまで後少しだ。
そしてその3日後。
予定より1日は早く、俺達はシアーマタの街にたどり着いた。

ちなみに。
ある日のデザートで作ったフルーツヨーグルトは、予想通りに美味だった。

そのに（後書き）

えーと、やっとシアーマタにたどり着きました。
次回も様々な出会いを書きたいです。
いつも見て頂き、ありがとうございます。
こんな小説でも、暇潰しになっているんなら作者は幸せです。

あ、感想をくださるとさらに幸せになります。

以上、駄文でした。

そのさん（前書き）

ゾアマン密林。
上～下位クラスのモンスターが多々出没する密林地帯。
数多くの商団は、シアーマタへの近道にこの密林を通っている。
そのため護衛に雇われるハンターも少なくはない。

そのさん

街の入り口での審査も終わり、俺達はついにシアーマタの街にたどり着いた。
「うわぁ・・・。村とは大きさが全然違いますね！」街を見て興奮気味のルース、入り口からこうだ。
「あれ？大きい街とか訪れた経験、あんまりなかった？」
「いえ、一応ドンドルマに一回だけ。でも人の多さに驚いちゃって。なんか色々バタバタしちゃって、あんまり覚えていないんです」「そうなんだ」
ちなみに今俺達は竜車で街のメインストリートを移動している。
実は俺が若手の頃、シアーマタに一度訪れている。
だからその時の記憶を頼りに、集会場に向かっているわけだが、いかんせん道中に誘惑が多い。
「あ、ラットさん。あそこでなんかセールやってますよ」
「ラットさん、あれギガントミートですよ？ああやって量り売りしてるんですね～」
「ラットさん、沢山リンゴが積まれています！。主さま、是非とも買ってくりゃれ～、です！」
「・・・最後のはもう二度と言ったら駄目だからな」・・・いかんせん誘惑が多い。
行く先々で何か面白いものがあると、すぐにルースが反応してしまう。
「大きい街って沢山人がいますし、色んなものが売っていて、なんか楽しいです。なんでも欲しくなります」
顔を輝かせるルース。
「そうしたら財布の紐が緩くなるんだ、と」
俺は、竜車の上から道ばたの露店を見ながら言った。「ハハっ、気をつけないとな？大きい街には誘惑しかないぞ？」

「はい・・・」
ルースは苦笑いで周りの露店を見た。
「あ～・・・、でもあれとか美味しそう・・・。あ、カジキマグロの解体ショーやってる。楽しそうだな・・・」
「・・・集会場についてから、カウンターで近くの宿でも聞いて今日の夜ご飯でも買いに行こうか。ここは朝・昼・夜と、いつでも市場を開いているんだ」
まあ夜は市場というか、飲み屋の屋台がふえるんだが。
「そうなんですか？まあそうと決まれば集会場に早く行きましょう！」
勢いよく手を上げたルース。
「ラットさん、今日は何を食べますか？」
そう言うと、ルースは腕に抱きついてきた。
「今日は私が作りますよ！」
・・・やれやれだな。
いつの間にか慣れてしまったルースの抱きつきを腕に感じながら、俺は竜車を走らせた。

「・・・はい、確認しました。ラットさんにルースさんですね」
俺達は集会場のギルド嬢に渡したカードを返してもらった。
「密林での依頼が2件、ドンドルマ・ミナガルデ各都市行きの商団の護衛、そして地方へのハンター派遣など。これらの依頼がただいま受付中です」
ギルド嬢は依頼書を数枚取り出し、カウンターに並べて見せた。
「特別で緊急の依頼などは？」
俺はギルド嬢に尋ねた。
「本日はございませんが？」
「んじゃ、今日は依頼の受注はいいです。近くの宿を教えてくれませんか？」

「かしこまりました。まずこの街の地図をお渡しします」
地図を差し出すギルド嬢。「ここが集会場です。この道を・・・」
地図を使って丁寧に説明してくれたギルド嬢に礼を言う。
「それじゃ、これで」
「ありがとうございました。それでは改めて、シアーマタの街にようこそ！ゆっくりしていってくださいね」
俺達は帰ろうとした。
と、その前に。
「あ、ギルド嬢さん？お名前よろしいですか？」
隣にいたルースは、俺に少し顔をしかめて見せた。
「・・・カトリス・アイン、です。ありがとうございます」
最高の笑顔で答えくれた。「それじゃあ、また」
俺はカウンターに５００ゼニー金貨を置いて、俺達は集会場を後にする。
「ラットさん・・・、最後のは一体なんですか？」
不機嫌そうにルースは、先に竜車に乗り込んだ俺に、静かにそう言った。
「確かにギルド嬢さんはとても美人でしたが・・・。私という女性が横にいるのに堂々とナンパとは、失礼だと思います！」
そうルースは言いながら、竜車に乗り込む。
「・・・ナンパぁ？突拍子もなくどうしたの？」
「だって、ギルド嬢さんに名前を聞いてお金を・・・」
不機嫌そうに口を尖らせるルース。
「あぁ、あれか」
俺は納得した、・・・でもあれだけでナンパか？
「あれは、チップだよ」
「チップ？」
「・・・ハンターが依頼を受けないで、道だけ聞いて帰るのは失礼だからな。やり方は地方によって違うんだけどね。俺は名前を聞いて、そのお礼という形でチップを渡すようにしているんだ」

「なっ、なるほど・・・。そんな事、気にした事もありませんでした」
ルースは少し驚いていた。「・・・ルースはまだ気にしなくていい世界かな？熟年のハンターが勝手にやってる、ギルド嬢に対する一つの礼儀だから」
「は、はあ・・・」
「まあ、それよりも早く宿に行こうか。夜飯も、作ってくれるんだろ？」
「あ・・・、はい！」
すっかり機嫌は良くなったようだ・・・。
てかナンパってなんだ、ナンパって。

宿についた俺達はカイナを宿の主人に預け、貰った鍵の番号の部屋に荷物を置いた。
「・・・ラットさん、これで荷物全部ですよ」
ルースは部屋にある2つあるベッドの、窓側のベッドに座った。
「・・・野菜とか村で貰ってきた食料は荷台に置いてきたんですがね。それでも洗濯したい服とかで、持ってくる荷物が増えちゃいました」
「ん、大体いい時間かな。買い物にでも行こうか？昼飯は露店をまわりながら、色々なものを食べよう。試食とか、出店とかが有ると思うからな」
ルースは目を輝かせて
「行きましょう！」
早いな・・・。
「あれ、そういえばお金ってどうなっているんですか？」
「どう、とは？」
「私もある程度は持っていますけど、なんか今までラットさんが全部払っている気がします。実際ここの宿代もラットさんがさっき全

部払ってましたし」
「ああ、ぜんぜん気にしなくていいよ」
「でも、悪いですよ。せめて自分の分だけでも・・・」
「ん～と・・・。俺に格好つけさせろよ、というセリフで解決して？頼むよ」
「いやでも・・・、お金の事ですし・・・」
はあ・・・。
俺は隣のベッドに座り、ルースに顔を近づける。
ルースは目を見開き、顔を少し赤くした。
「頼む、お金のことは気にしなくていいから。あ、それじゃあ服とかは自分のお金って事で。生活にかかるお金は、俺に任せてくれ。それで、どうだ？」
ルースに妥協案を出す。
「・・・えっと・・・、わかりました。でもどうしてですか？」
頬を赤くしたままのルースが、そう尋ねる。
「んと・・・、俺は意外とお金持ちってことで」
「はぁ・・・。話す気は無いんですね」
ため息をつくルース。
ルースは立ち上がり、俺に言った。
「わかりました、もう聞きません。さあラットさん、市場へ行きましょう！・・・実はもう、夕飯のメニューは決まっているんですよ？」
「・・・ああ、わかったよ」
わかってもらえたのかな？俺達は宿を後にし、市場へ向かった。
「・・・ラットさんは、ルースをなんか子ども扱いしているような気がします。これじゃあルースも、ラットさんに甘えたくなってしまうじゃないですか・・・」小声でルースは何か呟いていた。
「ん？なんか言った？」
俺はルースに尋ねた。
ルースは笑顔になって

「何にも言ってませんよ？」
また俺の腕に勢いよく抱きついて来た。
「さ、ゆっくり市場をまわりましょうね？」
「まったく・・・」
抱きついてきた腕を、俺は今更振りほどきはしなかった。
「んじゃ、行くか」
俺達は、昼の市場の喧騒に消えていった・・・。
・・・いや、まあ少し恥ずかしかったけどね。

「それにしても、大きい市場ですよね・・・、人ごみで暑かったです・・・」
ルースは呻いた。
「まあ、大陸的にも大きい部類に入る街だしね」
俺はルースに言う。
「ここシアーマタは、こっち方面の村や町への中継点だから、色々な所から人や物が来るんだよ。だから、こんなに活気ある市場があるのかな？」
ただいま、午後3時。
12時という昼ど真ん中の市場はかなり混んでいて、人の流れで上手く立ち止まる事ができなかった。
まあ色々な出店が数多くあったので、出店巡りをしている間にお腹がパンパンになって、空腹には困らなかったが。
そこで一旦流れを抜けて、人ごみが落ち着くまでベンチで座って待って（座って待っている間も、出店で買ったアイスクリームを食べている）、後から夕飯の買い物をする事にしたのだ。
今俺達は、すっかり落ち着いた市場を買い物してまわっている。
「えと・・・、野菜は沢山あるから・・・」
ルースは、肉屋に寄った。「へい、らっしゃい！」
店の店主に、ルースは聞いた。

「ガビアルカルビなんて、ありますか？」
「どれくらい必要だい？」「それじゃあ、２００ｇお願いしますね」
「はい、ありがとね～。オマケしちゃおうかな？お嬢さん美人だし」
「また～、上手いこと言いますね」
・・・。
次に魚屋。
「いらっしゃい、美人のお嬢さん！今日は生きのいいサーモン、入ってるよ！」「あら、美味しそう。それなら、刺身用のを下さい。２人分ね」
「はい、刺身用２つかしこまりましたー！オマケしてこの魚も入れちゃうよ～」「ありがとうございます」・・・。
「後は・・・」
「なあ、ルース」
「はい、なんですか？」
俺は、いい加減ルースに伝えることにした。
「さっきからオマケの方が高級だったり量が多かったりするから、次からはオマケはしなくていいからと言ってくれ」
肉屋ではガビアルカルビの量が頼んだ量の倍は入ってるし、魚屋なんてオマケに紅蓮鯛という高級魚をつけてきたぞ？本当にいいのかコレ？
実は結構前からこんな調子で、行く店行く店でオマケを貰っている。
「あら、いつの間にかスゴい荷物に・・・」
「ああ、結構前からこうなんだ」
重いし、前が見えない。
ルースは市場のおっちゃん達に、大人気だったようだ。
良かったような・・・、疲れるような・・・。
「皆さん、優しい方々なんですね」
いや、そうじゃないんだと思います。

「大丈夫ですか？ラットさん」
部屋に帰ってきて、ベッドに倒れこむ俺。
「あ、ああ・・・。ちょっと荷物が多くて、疲れてしまった・・・」
「この量は・・・明日の分どころか、一週間は持ちそうな勢いですよね。まあラットさんも私もハンターだから、普通の人よりは比較的食べる人種。減るのは早そうですけどね」
早速今から、料理作ってきます。
そう言ってルースは下に行って、宿の主人にここの厨房を使わせてもらいに行った。
「ふう・・・」
一人になり、ため息をついた。
この街にはどれくらい居ようか？
ノロップ村の次の行き先はココと決めていたのだが、ルースがついてきたから次の行き先はまだ決めてなかった。
2人で決めたかったし、ルースの寒がりを考えると南下せざるを得ないだろう。「くぁぁぁ・・・」
欠伸をしてしまう。
ベッドで寝転んで考え事をしていたからだろうか？
いつの間にか俺は、夢の旅へと出発していた。

「ラットさん？・・・あら」
料理が出来たからラットさんを呼びにきたんですが、ラットさんはベッドで寝ていました。
「・・・」
私は、もう見慣れたラットさんの寝顔を見ながらラットさんの側に近よった。
「ラットさーん・・・、起きてくださ～い・・・？起きないとイタ

ズラしちゃいますよ、なんてね」
「ん・・・、うぅん」
「キャ！」
突然、ラットさんが抱きついてきた。
「ラッ、ラットさん？冗談ですよ冗談」
よく聞いたら、スースーと寝息が聞こえた。
「ね、寝ているんですか」ラットさん、どんな寝相ですか・・・。
・・・あったかいなぁ、ラットさんの腕の中。
いやいや、こんな事ではいけません。
自分に厳しく、ラットさんにも厳しくです。
・・・でも気持ちいいなぁ。
はっ、いつの間にか私もベッドの中に入ってしまっているです！
い～け～ま～せん、私！
あれだけ時間をかけて作った夕食です、　まだ暖かいうちに食べてもらいたいんです。
なんとかラットさんの腕から無理やり脱出。
結構動いたつもりだったんだけど、起きませんね・・・。
「ラットさん、ご飯が出来ましたよ！起きてください！」
ラットさんの体を何回か揺らす。
「・・・ルース、起きたから。起きたから止めてくれ」
するとラットさんはすぐに起きてくれた。
「ご飯ですよ？早く下にいきましょう？」
「もうそんな時間か？」
起き上がって窓の外を見たラットさん、目を覚ます様に頭を振って、
「本当だ・・・、もう真っ暗だ」
顔をしかめたラットさん。「3時間くらい寝てたのかな」
「気持ち良さそうでしたよ？いい寝顔でした」
それに抱きつかれました、とはもちろん言いません。「・・・ご飯作ってくれたんだよな」
「あ、はい。そうでした。お腹、空いてますか？」

「正直、寝起きで食欲ない・・・。けど、さっきからいい匂いがしてたまらない。早く下に行きたいかな」「はい！行きましょう！」
私達は揃って部屋を出た。「どんな料理を作ってくれたのかな？」
「楽しみにしていて下さい？きっと喜んでくれるはずですよ。普段ラットさんが作ってくれる料理に負けないくらい美味しいはずです！」
「・・・まあ乾燥肉とか、野菜とかをごった煮にした鍋の味つけを変えているだけなんだけどな」
二人で楽しい会話。
今日の夜は、こうやって過ぎていきました。
明日は、仕事を探すのかな？それとも街を出て、また旅に出るのかな？
とりあえず今は、夕飯です。

・・・ルースは料理をめちゃくちゃ多く作っていた。俺やルースの2人では食べきれなかった為、宿の主人や他の宿泊客に振る舞う事にしたが、皆喜んでくれたようだ。
そうしていつの間にか宴会となった宿の夜は、騒がしく過ぎていった・・・。

～ルースのレシピ～

大陸風ガビアルカルビ焼き。
「ガビアルカルビをこんがりと焼いて、色んな野菜を煮つめて作ったソースでいただきます。ドンドルマで作られている料理みたく、一度に大量にお肉をお皿に盛って、ソースを絡めるのがポイントで

す」

スネークサーモンのカルパッチョ。

「サーモンのカルパッチョです。酢やドレッシングはお好みで、サラダとして食べてもらいましょう」

紅蓮鯛飯。

「鯛を丸ごと入れた炊き込みご飯です。ふっくらと甘く、おこげも美味しいと思います。あ、最後にお茶漬けにするのも良いかも！」

そのさん（後書き）

どうも、狩りをあまりしない小説です。
どうにも文章が上手くならなくて、やきもきしながら書いています。
最近は他のモンハン小説を見て、自分とのレベルの違いに愕然としながら現実を受け入れています・・・。それでも見てくれている神様のような方々に、私は感謝しっぱなしです。

以上、駄文でした。

シアーマタの街編　姫とネズミの女王退治　そのいち（前書き）

シアーマタの街で多く出される依頼は、商団の護衛任務である。
しかしラットは主な交通手段が竜車の為、護衛任務は受けないようにしている。

シアーマタの街編　姫とネズミの女王退治　そのいち

・・・翌日。
俺とルースはこれからの旅の計画を話し合う為に集会場で朝食をとることにした。
「とりあえず俺達には、２つ選択肢がある」
朝食は軽めに、俺はパンとカリカリに焼いたベーコンを頼んだ。
ルースは、ご飯に焼き魚にミソスープという、最近流行中の別大陸料理朝食セットを頼んでいた。
「ん～、骨が多いなぁ・・・。えっと、また旅に出るかココで仕事を探すかの２つですよね？」
魚の骨に苦戦するルース。「食べにくそうだな、焼き魚・・・。そう、その２つだよ」
パンを食べながら、俺はこう続ける。
「今のところ、この街には急を要する依頼はない。出来ればルースの修行の為に、飛竜種なんかと戦ってみたかったんだが・・・」
「まあ飛竜種はちょっとまだ手をつけにくいですけどね・・・」
苦笑いのルース、魚の骨も中々取れていない。
・・・不器用だな。
「・・・骨取るよ。魚ちょうだい？」
ルースから皿を取って、魚の骨を取り始めた俺。
「まあなんにせよランポスとかを相手にするよりは、別の街や村でもっといい依頼を探した方がいいのかもな。ほい、取れたよ」
「・・・ありがとうございます」
ルースは顔を赤らめながら言った。
「・・・なんかラットさんは、私のお兄さんみたいですね」
「？、ルースって兄弟いたっけ？」
「あ、いやそうじゃなくて―」
「「大変だぁ！」」

俺は声がした方に振り向いた。
ルースも驚いた様子で、入り口で叫んだ男に目を向けた。
「ここに向かってくる途中の商団が、モンスター達に襲われたそうだ！」
「商団は何とか逃げ切ったようだが、積み荷のほとんどをやられている！」
「落ち着いて下さい。どんなモンスターに襲われたんですか？」
いつの間にかギルド嬢が男達の前にいた、男達に話しかける。
「お、おおカトリスさん。実は俺もさっき話を聞いたばかりだから詳しくは解らない。いきなりランゴスタの群れに襲われたと言っていた」
「ランゴスタの麻痺毒にやられた子どもも、商団にはいるらしい。そっちは街の人間でなんとかするが、早く駆除に行かないと犠牲者は増え続けるぞ！？緊急の依頼を早く出して、ランゴスタ共をなんとかしてくれ！」
「・・・ランゴスタ、ですか」
ギルド嬢が思案顔で言う。「・・・時期的に産卵のシーズンですね。おそらくクイーンですね・・・」
困ったような顔をしたギルド嬢。
「わかりました、依頼書をギルド名義で出しましょう。しかし・・・」
「なぁ、カトリスさん。クイーンって一体どういうことかい？」
クイーンという単語がわからずに、不思議そうな男。「クイーンとは、クイーンランゴスタの事。つまり・・・」
ギルド嬢はため息をつきながらこう言った。
「ランゴスタの女王蜂の事です」
困ったように言うギルド嬢。
「おそらく密林に巣を作っているのでしょうね・・・、この時期はよく中央ギルドでも確認されています」「でもハンターさんに頼めば楽勝だろ？一般人にもなんとか倒せるランゴスタの、親玉みたい

な奴なんだべ？」
「とんでもございません。クイーンランゴスタはその強さと危険さから、上位ランク以上と認定されているモンスターです。並みのハンターでは太刀打ちできません」
何やら考える仕草のギルド嬢。
「困りました・・・。常駐ハンターは全員出払っていますし、今お声をかけれる上位ハンターさんなんてこの街には・・・」
ギルド嬢はそう言った後、ハッとした表情になる。
そして真剣な顔で俺達のいるテーブルに歩いてきた。「・・・ラットさん」
「話は、聞いてました」
俺はルースをチラッと見てから、ギルド嬢さんに言った。
「今日に限らず、この街には数多くの商団が訪れます。そしてそのほとんどがあの密林を通って、この街に来るのです」
「確かに、ほっといたらまずいよな」
「ラットさん、受けましょう。このまま見過ごす事は出来ません！」
ルースはそう言った、しかし・・・。
「ルース、残念だけどこれは受けられない」
「え？」
「君のＨＲが足りない」
・・・クイーンランゴスタの依頼は、最低でもＨＲ４以上の上位ハンターはでないと受けられない。
「なっ・・・いや、それでもラットさんは受けられます！」
ルースは叫んだ。
「俺は、ルースを鍛えたいから一緒に旅をしている。俺１人が依頼にいってもルースは何一つ成長しない。だからこの依頼は受けられない」
「そこを何とか、お願いします！！」
ギルド嬢は頭を下げる。
「上位ランク以上のハンターは、ラットさんしかここにはいないん

です！」
「・・・」
俺は、黙ってルースを見た。
「私の事なんかいいです。それよりも・・・」
ルースはめいいっぱい息を吸い込んで、
「困っている人を見捨てることは、出来ません！！」叫んだ。
驚く俺とギルド嬢。
・・・本人は恥ずかしそうに顔を赤らめ、小さくなっていた。
「・・・カトリスさん」
「はい」
「ルースのＨＲって、なんぼでしたか覚えてます？」
「え・・・、３だったかと。下位クラスハンターです」
「んじゃ・・・、依頼書の内容、こう書いておいて？『ランゴスタ５０匹狩猟』って」
「え、それは・・・」
「たまたまクイーンランゴスタが出たことにしちまえばいい」
「そんなこと、出来ません・・・」
「カトリスさん」
俺はギルド嬢に爽やかな笑顔を向ける。
「責任は俺が持ちます」
「ラットさん・・・」
俺は立ち上がり、カウンターの中にある白紙の依頼書を取り出した。
そこに、こうサインする。『ランゴスタ５０匹狩猟。ハンター名
ラット・ハルバリ　ルース・アンジェラ』。
「はい。あと面倒な手続きは、よろしく！」
ギルド嬢に依頼書を渡し、ルースに呼び掛ける。
「ルース、仕事だよ！」
「ラットさん・・・、尊敬します！」
俺達は集会場を出ようとした。
「待ってください！」

後ろから声。
ギルド嬢は不安そうに言う。
「・・・責任はとれませんよ？」
「俺が責任をとる！・・・って事で。まあ任せてくださいよ」
そう俺が言うと、ギルド嬢はため息をついた。
「さすが・・・。二つ名通りのハンターですね」
「え？」
「ルースは気にしない！、・・・それじゃ、行きます」
それを聞いたギルド嬢は、祈るような格好になって
「お二人に、ご武運あらんことを・・・」
と言ってくれた。
「ありがとうございます。んじゃ行ってきます」
俺達は礼をして、準備をするために宿に帰る事にした。

「いや～、あのお兄さんで大丈夫なのかい？カトリスさん。相手は強いんだろ？」
「はい、きっと大丈夫です」
カトリスは男達に言う。
「大丈夫です。ラットさん、いや・・・」
カトリスはカウンターに戻って、依頼書に書かれたラットの名前を見ながら、こう言った。
「・・・『塗り替える者』なら」
そうして、俺達の進路は決まった。
今日の依頼、クイーンランゴスタ討伐（建前、ランゴスタ５０匹狩猟）

「・・・ルース。ホットドリンクは邪魔になるだけなんだな～」

いつものようにホットドリンクをポーチに入れたルースに注意した。
「あ・・・、ついいつもの癖で」
ポーチからホットドリンクを取り出すルース。
「・・・ルースはクイーンランゴスタなんか、見たことも聞いたことも無いと思う」
「・・・ランゴスタを統率する女王蜂。って、さっきラットさん教えてくれましたね」
「ああ。・・・大きいだけじゃなく、侮れない攻撃力に厄介なランゴスタ達を統率する力。中々手強いヤツだ」
「具体的には？」
「見ればわかる。中々気持ち悪いぞ」
「それは、嫌ですね・・・」
「簡単に概要だけ話すよ？」
俺はクイーンランゴスタについて、ルースに簡単に説明する。
「・・・と、いうわけだ。」
ま、話の内容は実際に狩りの現場で確認すればいいことだし、今回は省略。
「凄いです・・・。上位のモンスターは下位のモンスターとは別モノとして考えないといけませんね」
感心顔のルース。
「んじゃルース。これから密林に向かう訳だが・・・」
「はい」
「相手は仮にも上位モンスター。変な意地で戦っても、ルースが1人で勝つのは困難な相手だ。だから・・・、俺の側を離れないでいて欲しい。絶対に俺が守ってみせるから」
「・・・よろしくお願いします！！」
さあ密林よ、いざ行かん？「あ」
「どうしました、ラットさん？」
「・・・朝食の代金、払い忘れてた」
・・・。

「よし、早く出ようルース！」
「早く出ましょうラットさん！」
改めて、いざ行かん！密林へ！
・・・後でカトリスさんに怒られました。

街を出た俺達は密林に向かって竜車を走らせた。
なおルースは暑い所は得意であり、かつランゴスタの様な虫相手は大得意らしい。

シアーマタの街編　姫とネズミの女王退治　そのいち（後書き）

短い、短いよぉ・・・。
まさかＵＭＤが無くなるとは思いもしなかったです。
中古、来週買ってきてから小説を書かせていただきます・・・。
別にこんな作品の更新が遅くても、皆さんは平気だと思います。
他の作品の箸休めとして、この小説をご覧下さい。

以上、駄文でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2167k/

モンスターハンター 愚かなネズミの流れ仕事日記

2010年10月20日16時29分発行